

七
伏

白秋全集
15

詩文評論

1

白秋全集 15

第三回配本(第1期 一、二、四卷)

一九八五年二月五日 発行

定価三八〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
鐵 行 所 岩 波 書 店

電話(三上六五四二二)
振替東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

『白秋小品』

自序	五
葛飾小品	二
葛飾から伊太利へ	三
螢	六
馬	三
蓮の花	四〇
小笠原小品	四
油虫	四
正覺坊	五
桐の花小品	九

桐の花とカステラ	．．．．．	七
昼の思	．．．．．	六
感覚の小函	．．．．．	五
白猫	．．．．．	六
生ひたちの記	．．．．．	五
生ひたちの記	．．．．．	六
朱欒のかげ	．．．．．	五
朱欒のかげ	．．．．．	六
朱欒(二六)	．．．．．	博多(二〇)
悲哀(二六)	．．．．．	蟹味噌(二三)
さかづき(二六)	．．．．．	甘薯(二三)
肥後の三角	．．．．．	．．．．．
河豚	．．．．．	．．．．．
冬の言葉	．．．．．	．．．．．
春が来ればいい(二四)	．．．．．	十一月のことば(二四)
十月の言葉(二四)	．．．．．	十二月の言葉(二五)

植物園小品	一四
春の暗示	一五
温室観覧	一六
春	一六
四月の葉草園	一六
春のゆく日	一六
五月朔日	一六
五月末	一七
六月の花	一七
女四種	一七
折々の手記	一八
幕あき前	一八
汽車の感覚	一八
信州より 木下李太郎君宛一通	一八

『白秋小品』増補

〔アルス刊『白秋全集』第二巻〕

印象日録	一九五
黒人の夢	二〇七
正覚坊と禿	二一〇
ある一つの喜劇	
蘆間の煙	二三九
潮来の黎明	二四三

『雀の生活』

小序	二五五
I 雀と人間との愛	二五九
II 雀と人間との相似関係	二六九
III 雀と人間との詩的關係	二七五
IV 雀の形態と本質	二八五
V 雀の神経感覚及性格	三九九

『洗心雑話』

VI 雀の団体生活	四二五
VII 雀の人間化	四二三
VIII 雀の靈覺とその神格	四二三

はしがき	四二
------	----

その一	四八五
その二	四九一
その三	四九七
その四	五〇四
その五	五〇九
その六	五一五
その七	五二二
その八	五三三
その九	五四一

その十・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 五九

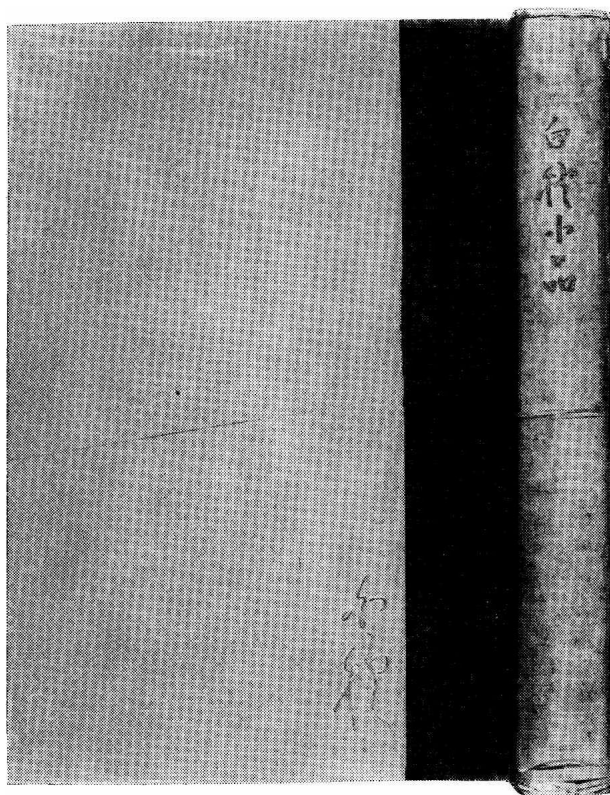
『洗心雑話』増補

『洗心雑話』白秋文庫版

文庫版『洗心雑話』覚書・・・・・・・・・・ 五七

後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 五九

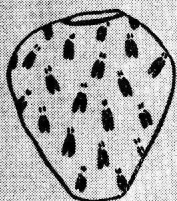
『白秋小品』



〔表紙〕

〔大正5年10月23日 阿蘭陀書房刊〕

白粉小口



北原白秋著

東京・阿蘭陀書房

自序

詩歌の製作のひまびまに、私は時々散文を書いた。詩のやうなものもあり小説のやうなものもあり、スケッチ風のものもある。私が詩人で、私の生活が既に詩であるから、多少世間の散文とは違つてゐるかも知れない、どうでもいい、私の散文はこれだ。これは確かに私の書いたものだ。

之等の中には旧いのもあれば新しいものもある。「葛飾小品」は最近のもので、私の現在の生活を其儘出したものだ。紫烟草舎の烟がこの野つ原の中からほそぼそと天にのぼつてゐるうちは、まだ沢山かういふ小品ができるだらう。さうしてこれから確かりした長い小説も作つて見る積りでゐる。

「小笠原小品」は自分にも小説だか何だかわからぬ。油虫や、正覚坊を主人公にして書いて見たのである。あの絶海の孤島にはるばると私が流離の身を寄せたのは、もう二年の昔になつた。其処の自然は眩しいほど明快で、動物も、植物もその中に生棲してゐる人間も全く不思議な色彩や変つた性格を持つてゐるものばかりだつた。私は今にそれらを書く。そのババヤ物語の一卷が完成したら、私は怪しい島の生物どもに改めて赤い酒や珍奇な果物でも御馳走してやらう。此二篇はその物語の小引として見ていただきたいのである。

桐の花小品は歌集の『桐の花』の中に一度収めたものである。中にも「桐の花とカステラ」「昼の思」の二篇は日本の歌に対する私の小さい抒情的の評論である。歌に就ての考へは稍現在とは違つてゐるが、

その時代の思想は偽りなくあらはしてある。あの頃は全く瀟洒な薄紫の桐の花のやうな心だつた。

「生ひたちの記」は骨牌の女王を表紙にした私の一番なつかしい抒情小曲集『思ひ出』の序文として、曾てその巻頭を飾つた怪しい生ひたちの記である。首の赤い蛍の触覚や松脂のにはひや、私の幼年期の感覺的生活が一番素直に出てゐる。水郷柳河の風物もあはしたものである。私はこの七八年といふもの一寸も国には帰らないが、話にきけば次第に廢れて了ふさうである。廢る可きものは廢れさした方がいい。私の一族もすっかり上京して、今は郷里との縁も次第に薄くなつてゆく。あの何とも云へぬ子守唄の節廻し、大人になつても思ひ出すは子供ごろのあはれさである。誰しもさうだが、私はやつぱりいつまでも柳河のTONKA JOHNである。

「朱樂のかげ」は曾て私の主幹してゐた雑誌「朱樂」の中から拾ひあつめたものである。朱樂を思へば九州がなつかしい。朱樂の出る銀座の夜の露店がなつかしい。朱樂の出るのは恰度、日本の菊の花が東京の秋から冬にかけて透きとほつた硝子の飾窓の中に薰り出す、一年中の最も寥しい、趣のふかい時節である。これらの小品はきれきれのものばかりであるが、流石にあの頃が忍ばれる。

「植物園小品」は私が牛込の新小川町に居た頃の黒い皮ノートから、探し出したものである。もうあれから六七年も経つた。あの頃はパン会の盛時で、私達も『屋上庭園』を発刊したり、氣狂のやうに詩作したり、論議したり、酒を飲んだりしたものだつた。私はよくそれらに疲れると小石川の植物園に終日半日と日を暮らして、草や木の一枚一枚の葉や、種々な花の色彩を写したり、温室植物の配置図を丹念に取つて見たり、咲いた花、まだ咲かぬ花の名まで一々にノートに書き留めたものだつた。その中で「春の暗示」の一篇は『桐の花』に掲げた事がある。もとより園内を漫步しながら其儘書きつけて行つたものであるか

ら作品として落ついてゐるかどうかわからぬ。その他「女四種」を除いては、今度新たに、その黒ノートから写し取つて、多少の修正をしたものである。詩のやうな妙なものになつたが、あれはたゞ植物園の季節の言葉として見ていたゞき度い。ノートは正しい。

巻末の「折々の手記」も同じくその黒ノートから写し取つたものである。これは其儘にして置いた。「幕あき前」は歌舞伎座の三階で、「汽車の感覚」は生家の破産に際して慌ただしく郷里に帰つたその旅中の汽車で、「信州より」の二通の消息は千曲川のほとりの乳草の中で、書き留めて置いたものである。

まづ私の散文と云ふのはこれ位である。あはれなものだが、私自身のもものと思うとなつかしい。首の赤い蚩を今度も扉に描いて置く。

大正五年十月

南葛飾の紫烟草舎にて

白 秋 識

